

前項で賀茂祭に斎王が登場することを記したが、ここで斎王について述べておこう。

斎王とは、即位した天皇の御杖代(みつえしろ)〈名代〉となって伊勢・賀茂両社に奉仕する未婚の内親王ないし女王を言い、前者を斎宮(さいぐう)〈7世紀後半から14世紀前半まで存在〉、後者を斎院(さいいん)と称し、ここでは賀茂祭に関わって述べるので、「斎王」は斎院を指す。斎王(賀茂の斎院)は平安遷都後の嵯峨天皇の皇女、有智子(うちこ)内親王(807～847)を初代とし、4才で卜定(ぼくじょう)〈占いにより定めること〉され、退下(たいげ)するまでの21年間をつとめた。最後は35代の後鳥羽天皇皇女の礼子(れいし)内親王(1200～1273)である。斎王に選ばれると宮中の初斎院(しよさいいん)で潔斎生活を1年あまり送り、鴨川で禊をして紫野に所在の斎院御所に入る。そして賀茂社の重大行事に奉仕したのである。天皇が代わったり、身内に不幸があったり、当人が病などで任務に絶えられなくなると退下する。ただ再任はあったようで、大斎院(だいさいいん)の異名をもつ村上天皇皇女の選子(せんし)内親王(964～1035)は円融・花山・一条・三条・後一条の5代の天皇の半世紀余りにわたって斎王をつとめた。鎌倉時代初頭で斎王の制度が終わって以降の路頭の儀は、見栄えのしない殺風景なものであった。何しろ女人列がなくなったのであるから。それを憂えてのことであろうか、20世紀半ば、民間から選出された斎王代(さいおうだい)〈独身女性〉を中心とする女人列が加わり、祭列に花を添えることになった。

賀茂祭に奉仕するために前もって斎王は身を淨める禊(みそぎ)を行ったが、それを斎王御禊(さいおうごけい)と言った。二条以北の鴨川に幄舎(あくしゃ)を建てて行う例が多い。紫野の斎院から鴨川までの祭列に多くの見物人が押し寄せた。『源氏物語』(「葵」の巻)で有名な「車争い」は、この斎王御禊のさいの見物場所をめぐる争いである。「かねてより物見車心づかひしけり。一条の大路所なくむくつけきまで騒ぎたり。所どころの御棧敷、心々にし尽くしたるしつらひ、人の袖口さへいみじき見物(みもの)なり」。趣向を凝らした物見車や棧敷、その御簾からこぼれる出衣(いだしぎぬ)の袖口までが見物の対象となっている。一条大路は気もち悪いほど混雑している様子が伝わってくる。

隙間ないほどに立ち並んだ物見車。遅くにやって来た葵の上の車を立てる場所が見当たらず、車を曳いてきた従者たちは、良い場所にあった車を押しつけて、そこに自分たちの車を立ててしまった。乱暴されて押し退(の)けられたのは六条御息所(ろくじょうみやすどころ)の車であった。光源氏が祭列に顔を出すとあって、その姿を見ようと、忍んで来ていた六条御息所。人目に曝されたうえに権勢の前に泣き寝入りするしかない。その恨みは生霊(いきりょう)となって産褥(さんじょく)の葵の上に取り付いて苦しみ、男児(夕霧)を出産後に死に追いやる。

娯楽がこんにちとは比較にならないほどに少ない当時にあつては、賀茂祭などは一年のうちで最高の楽しみであつたろう。それだけに場所取りも激しかった。紫式部はそういう場面に何度となく遭遇していた。『源氏物語』が多くの人に読まれ、この話がとくに有名になったとみえて後世、これを題材とした絵画をはじめ美術工芸品に活用されたのである。

斎王御禊は、こんにち5月4日に両社の御手洗川(みたらしがわ)〈下社は瀬見の小川、上社は櫛の小川〉で毎年交互に行われている。



出典：ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>) 車争

図屏風(くるまあらそいずびょうぶ)

重要文化財

4曲1隻(175.7×370.8)

狩野山楽筆 江戸時代・慶長9年(1604)

所蔵者：東京国立博物館